

の七か条を下す。

七四〇年(天平十二年)

大宰府に於いて藤原広嗣が反乱を起し、征討軍が徴発される。

七四一年(天平十三年)

国毎に金光明四天王護国之寺(国分寺)・法華滅罪之寺(国分尼寺)を造営させる。

現在の国道八号線の工事中に、五間堂地区の現場から「金光明寂勝王経四天王護国品」と読まれる木簡が出土した。

「郡家の庄」の立て看板を建てた理由は「ここにある。

四天王護国の寺が存在した証拠ではないかと考えられるからである。

『郡家の庄』は(ぐうけのしょう)。と読み。中の庄町の付近に、郡役所があつたと考えられる。

喫煙室

(古事記より)

和銅五年(七一二年)、大安万侶によって三巻の「日本歴史書」が出た。

この中から「黄泉比良坂」(よもつひらさか)の話を中心に記して、古代の国生みと古代の「あの世」の考え方を見てみたい。

火の神を生んだために伊耶那美命は、その陰部(みほと)を焼かれてとうとう亡くなつてしまわれた。

残された男神の伊耶那岐命は「いとしい、俺の妻を、子供一人の為に亡くして仕舞うとは、何てことだ」と嘆き悲しみ身もだえして大声をあげて泣かれた。

男神は、何時までも妻を恋しく思う気持ち薄れず、後を追つて「死の世界・黄泉国」へ行くことにした。

黄泉国は地の底にあり、死者しか行かない暗い国である。そこは昼も夜もなく、ただ闇と静寂しかない所であつたが、男神は女神に逢いたい一心で恐怖も忘れ、只管に歩いて行つた。

そして妻の伊耶那美命に会うことが出来「いとしい妻よ、まだ国生みを終えていないじゃないか、どうかもう一度帰つて来ておくれ」と頼むのであつた」